

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 22 日現在

機関番号：14201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22720005

研究課題名（和文） 単称知覚指示のメカニズム

研究課題名（英文） The Mechanism of Singular Perceptual Reference

研究代表者

西村 正秀（NISHIMURA SEISHU）

滋賀大学・経済学部・准教授

研究者番号：20452229

研究成果の概要（和文）：本研究では、「視知覚において個別的対象はどのように表象されるのか」という問題に答えた。成果は次の三点に要約できる。(1) 枠組みとして使用されるべき知覚理論はバージ的単称志向説である。(2) 知覚における対象の表象は、従来の因果・情報論的表象理論を統計学の道具立てによって修正した、アッシャー／エリアスミス流の「相互情報量理論」で説明される。(3) 知覚経験の現象的性格は知覚指示に寄与しない。

研究成果の概要（英文）：This research project explored the mechanism of perceptual reference by focusing on visual perception. The results can be summarized as the following three theses. First, the theory of perception we should accept as the framework of this investigation is the Burgean singular intentionalism. Second, the theory which explains how objects are represented perceptually is the “mutual information theory,” a statistical causal-informational theory of representation elaborated by Usher and Elisasmith. Third, the phenomenology of perceptual experience is not required for perceptual reference in itself.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：知覚、志向説、指示、表象、相互情報量、注意

1. 研究開始当初の背景

本研究で扱う「単称知覚指示」（以下、「知覚指示」と略称）とは、ある主体 S の知覚経験 E が個別的対象 O（あのリンゴやあの犬など）を表象する事態を意味している。知覚指示のメカニズムがいかなるものかという問

題は、心の志向性を解明する際に避けては通れない古典的問題であり、現在でも盛んに議論されている。知覚指示がこれ程までに議論の対象となる原因の一つは、フレッド・ドレツキによる「因果・情報論的表象理論」の失敗にあると思われる。古典的な知覚指示の説

明は、知覚指示の必要十分条件を「OがEを引き起こす」点に求める因果的説明であった。だが、因果的説明には、OからEまでの因果連鎖の中からなぜOを選び出してよいのか説明できないという問題があった。ドレッキは、*Knowledge and the Flow of Information* (MIT Press, 1981)で、因果的説明をシャノンの情報理論によって補強した説明を提出し、この問題の解決を図った。彼のアイデアは、OがEの指示対象であることを「Oが存在する」という出来事から「EがOを表象する」という出来事に流れる情報量によって説明するものであり、具体的には、EがOを表象するという条件下でOが存在する確率が1の場合にOはEの指示対象と見なされる。だが、このアイデアは、因果的説明が抱える問題は解消できるものの、いわゆる「誤表象問題」などの別の問題を抱えていることが明らかとなった。その後、これらの問題の解決を目指して、「目的論的表象理論」が、ドレッキ自身を含め多くの哲学者によって考案されたが、目的論的表象理論にはそれ固有の問題点が指摘されており、未だに決定的な理論は提出されていないのが現状である。このような背景のもと、本研究では、ドレッキ以降の因果・情報論的表象理論の展開に着目し、それらの検討を通じて知覚指示のメカニズムに関する哲学的理論の提出を試みる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ドレッキ以降の因果・情報論的表象理論を検討することによって、知覚指示のメカニズムを説明することである。具体的には、次の三つの課題に答える。

(1)まず、「知覚経験の表象内容とは何か」という問題に答える。因果・情報論的表象理論は、知覚経験を「表象内容（以下、「知覚内容」）を持つ心的状態」として同定する「志向説」を前提している。だが、志向説には知覚内容をどのように特徴づけるかに応じて幾つかの種類がある。そこで、最初に知覚指示のメカニズムを解明するための予備的考察として、知覚内容の本性を特定する。具体的には、知覚内容に、知覚経験の現象的性格を説明する内容に加えて、知覚指示を担う指標詞的内容を認める多重内容の志向説を擁護する（なお、課題申請時には、志向説と対立する現象的選言説を退けることも予定していたが、その後、後者には既に説得力のある批判が提出されていたことが判明したため、本研究では、志向説を前提した場合、知覚内容の本性はどのように理解されるべきかという考察に集中した）。

(2)次に、「現在の情報論的表象理論の検討と適用」を行う。具体的には、課題(1)で提案さ

れた志向説において、指標詞的内容がどのように対象を表象するのかを、ドレッキ以降に提出された新しい因果・情報論的表象理論を用いて説明する。新しい情報論的表象理論には、反事実的条件法理論と統計学的理論の二つがある。これらは誤表象問題などのドレッキ理論が抱えている難点を克服する試みである。本研究では、新しい理論とその問題点を検討し、知覚指示のメカニズムを説明する情報論的表象理論の定式化を試みる。

(3)最後に、「知覚経験の現象的性格は知覚指示に寄与するのか」という問題に答える。課題(2)で定式化された因果・情報論的表象理論は、知覚指示を対象Oと知覚経験Eの間に成り立つ客観的関係によって説明する理論である。それに対して、そのような客観的関係だけでは知覚指示は十分に説明できないのではないかという批判がある。ここで、他に必要な条件として一番の候補となるのが、知覚経験の現象的性格である。本研究では、知覚経験の現象的性格が知覚指示に寄与とした場合、どのような仕方その寄与が認められるのかという課題を検討する。

3. 研究の方法

課題(1)については、まず、知覚内容自体には個別的对象を指示する要素を認めないアダム・ポーツの議論を取り上げ、彼の議論が成功していないことを論じた。次に、知覚内容に個別的对象を指示する要素を認める立場として、マイケル・タイ、スザンナ・シェレンバーグ、タイラー・バーズの理論を取り上げ、その中から、知覚内容に指標詞的要素を認めるバーズの立場を擁護した。

課題(2)については、反事実的条件法理論には既に詳細な批判（ヒルミ・デミールなど）が存在していたので、統計学的理論の検討に焦点を合わせた。具体的には、マリアス・アッシャーとクリス・エアスマスの文献を使用して、彼らの統計学的理論が、デミールやダン・ライダーが指摘する問題点を回避するのかを論じた。

課題(3)については、「知覚指示の認識には意識的注意が必要である」という論点を展開したジョナサン・キャンベルの文献を中心として、知覚経験の意識的・現象的性格が知覚指示において果たする役割を、視覚的注意に関する認知科学の文献を参照しながら検討した。

また、課題(1)と(3)については、以上の文献研究に加えて、イリノイ大学シカゴ校哲学部のデイヴィッド・ヒルバート教授（知覚の哲学）ならびにコリン・クレイン教授（心の哲学）と研究打ち合わせを行い、コメントや助言を得た。

4. 研究成果

「研究の目的」で挙げた(1)~(3)の課題について、それぞれ次のような成果が得られた。

(1)「知覚経験の表象内容とは何か」

上述のように、志向説には、知覚内容をどのように特徴づけるかに応じて幾つかの種類がある。その内、知覚指示との関連で考察すべきは、「知覚内容に単称内容を認めるか否か」という問題である。ここで、「単称内容」とは、知覚対象を指示する要素を含んだ知覚内容を意味する。単称内容を認める志向説は「単称志向説」、認めない志向説は「一般志向説」と呼ばれる。本研究では、①単称志向説が正しいこと、②単称志向説の中で最も説得力があるのはバージ的単称志向説であることを示した。

まず、①は一般志向説を擁護するポーツの議論を退けることによって示された。一般志向説には、従来「真正な幻覚からの議論」と呼ばれる難点があった。それに対して、近年ポーツは、この議論は回避可能であり、しかも、単称志向説には固有の問題があるという議論を展開していた。本研究では、(i)ポーツが提案する回避策は単称的要素を知覚内容に密輸入するか、知覚経験の「正確性」を極めて不明確な仕方で特徴づけるという問題に陥ること、(ii)ポーツによる単称志向説批判はすべてのタイプの単称志向説には当てはまらないことを論じ、単称志向説の方が説得力を持つことを示した。

次に、②については、単称志向説をラッセル的単称志向説、シェレンバーグ的単称志向説、バージ的単称志向説に分類し、その中からバージ的単称志向説を擁護した。前二者は幻覚における単称内容に空所を認める点で共通している。一方、バージ的単称志向説は単称内容に空所を認めず、代わりに指示詞的要素 *that* を単称内容の構成要素とする。単称内容に空所を認める立場は、空所を持つ幻覚の表象内容に真理条件を与えることができないという問題を抱えるため、バージ的単称志向説が支持される。

以上の結論は、知覚の哲学において現在議論されている単称志向説の是非を巡る問題に解答を与えただけでなく、単称内容の本性についても一定の見通しを与えた点で価値を有している。また、本研究内の位置づけから言えば、因果・情報論的表象理論が前提している「知覚内容」の本性を明らかにする役割を果たしている。

(2)「現在の情報論的表象理論の検討と適用」

ドレッツキの因果・情報論的表象理論が抱える代表的問題は、知覚経験が対象を間違えて表象することができないという「誤表象問題」である。この問題の原因は、エリアスミスが

言うように、ドレッツキが知覚経験と対象の関係を実質的には論理的関係とした点にある。アッシャーとエリアスミスは、この関係を「相互情報量」という尺度で測られる統計学的関係へと緩和することによって誤表象問題を解決した（「相互情報量理論」）。だが、彼らの理論には、①表象の向きを説明することができない（デミール）、②対象の認識における条件を恣意的に排除している（ライダー）という批判が提示された。本研究では、これらの批判が回避できることを論じた。

まず、①については、(i)相互情報量理論は基本的に因果的説明であり、因果の向きで表象の向きが説明されうること、(ii)仮に相互情報量では表象の向きが説明できないとしても、相互情報量の代わりに「カルバック・ライブラー情報量」を使えば、表象関係を統計学的関係として十全に特徴づけることができることを示した。また、②については、相互情報量理論に部分的に目的論的要素を導入することによって、認識条件の排除が正当化できることを示した。

以上の結論は、相互情報量理論がドレッツキの因果・情報論的表象理論の有望な修正案であること、それゆえ、知覚指示の説明としても有望であることを示している。

(3)「知覚経験の現象的性格は知覚指示に寄与するのか」

知覚経験の現象的性格と知覚指示の関係を考察する際には、「知覚指示」と「知覚指示の認識」を区別することが肝要である。後者に関しては、知覚経験の現象的性格が必要であるとする意見が多い（キャンベル、デクラン・スミーズ、スザンナ・シーゲルなど）。一方、前者に関しては、一部の哲学者（スミーズなど）や認知科学者（リキアン・ファン&ハロルド・パシュラー、ゼノン・ピリシンなど）から、知覚経験の現象的性格は不必要であるという見解が提出されている。本研究では、キャンベルが提示する知覚指示の認識に関する理論の批判的検討を通じて、これらの主張を支持した。

キャンベルによれば、知覚指示の認識には意識的注意が必要である。ここで意識的注意は、知覚経験の現象的性格を伴うものとして理解される。この主張を擁護するために、キャンベルは近年、ファン&パシュラーが提案する「視覚的注意のブールの地図理論」に訴えている。この理論によれば、注意は対象の選択と対象へのアクセスという二段階に区別される。ファン&パシュラーは、選択を無意識の因果プロセスとし、意識はアクセスの段階で生じると主張した。それに対して、キャンベルは意識を選択に結びつけて、知覚指示の認識には意識的選択が必要であると論じた。しかし、このようなキャンベルの議論

は失敗している。彼が意識を選択と結びつける根拠は、①対象の性質を概念的に把握できない幼児や動物も対象を意識的に選択している、②意識をアクセスに結びつけると意識が単なる付帯現象となる、というものであった。だが、①については、我々はキャンベルのようにアクセスを概念的把握と見なす必要はなく、②については、アクセスレベルの意識にも因果的力を認めることができる。それゆえ、意識を選択と結びつけるための説得力のある根拠はない。

このような結論は、「知覚指示=対象の選択」とした場合、知覚指示には知覚経験の意識的・現象的性格が介在しないことを示唆している。たしかに、知覚指示の認識については知覚経験の現象的性格が必要とされるかもしれないが、知覚指示自体にはそのような要素を認める必要はない。

以上の成果を合わせれば次のようになる。知覚指示はドレツキ理論を統計学によって洗練させた相互情報量理論によって説明される。この理論で前提される志向説は、バージ的単称志向説として理解される。また、知覚経験の現象的性格は知覚指示には原理的に必要とされない。このような結論は、現在も議論され続けている知覚指示について、因果・情報論的表象理論を軸とした一つの包括的説明を与えている。

最後に、残された課題に言及しておく。第一に、本研究では反事実的条件法理論を検討しなかった。上述のように、この立場には既に幾つかの批判が提出されているが、それらの批判が成功しているかどうかについて再検討の余地はあるかもしれない。第二に、知覚経験の現象的性格と知覚指示の関係について、本研究ではキャンベルの議論を取り上げたが、これはあくまでも一つのケース・スタディーである。特に、知覚経験の現象的性格が知覚指示の認識において果たしうる役割の詳細については、スミーーズによる議論など、キャンベル以外の議論も取り上げて検討する必要がある。これらの課題については他日を期したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①西村正秀、「表象の相互情報量理論の擁護」、関西哲学会年報『アルケー』、査読有り、20 卷、2012 年、掲載ページ未定

②西村正秀、「知覚経験の単称内容」、京都大学大学院文学研究科哲学研究室哲学論叢刊行会『哲学論叢』、査読無し、39 卷、2012 年、掲載ページ未定

[学会発表] (計 4 件)

①西村正秀、「表象の相互情報量理論の擁護」、関西哲学会第 64 回大会、2011 年 10 月 15 日、龍谷大学

②西村正秀、「知覚経験の単称内容」、科研費基盤研究(C)「現代的な知覚研究のための哲学的基礎付けとその体系化」H23 年度研究会、2012 年 1 月 28 日、信州大学

③西村正秀、“A Defense of Singular Intentionalism,” The American Philosophical Association, Central Division, 109th annual meeting, 2012年2月17日, Palmer House Hilton, Chicago, USA

④西村正秀、「指示、注意、意識—Campbell の議論の問題点」、応用哲学会第 4 回年次研究大会、ワークショップ「知覚の哲学の最近における展開をめぐって 2—「選言主義」を軸として」、2012 年 4 月 22 日、千葉大学

[その他]

ホームページ等

<http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/sensei/snishimu/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 正秀 (NISHIMURA SEISHU)

滋賀大学・経済学部・准教授

研究者番号：20452229